

『靈界物語神系説明書』

木庭次守謹編

書誌：木庭次守編，1941 提出，1951 改訂．靈界物語神系説明書．第二次大本事件控訴審裁判資料大本神系説明書第一編，目次+追記+pp. 1-34．添付資料：靈界物語三神系時代別活動表（昭和 26 年 12 月 28 日改訂）．

目次

- 一 天地剖判と主宰神決定
- 二 国祖の神政より御隠退まで
- 三 盤古大神の神政
- 四 大洪水と天津神の神政
- 五 黄泉比良坂
- 六 天の岩戸開き後
- 七 ハルナ言向軍
 - (1) 黄金姫
 - (2) 照国別
 - (3) 玉国別
 - (4) 治国別
 - (5) 初稚姫
 - (6) 結 論

◎ 追記

○付記¹ 本文は靈界物語を文章のままに拝読して²，その中心となった三つの

¹ 「註記」を「付記」に変更した。本報告のデジタル化の過程で，私木庭元晴（以下，監修者とする）は幾つかの点で変更した。文体や表現について：筆者木庭次守の執筆当時は，たとえば，然し乍ら，而して，など，接続詞または副詞には漢字が多用されている。給ふた，などの動詞や発音表記なども現在から見ると古びている。そういう表現を現代風に変更している。たとえば，「給ふた」については，発音としては「たもうた」であるが，文章表現としては，「こんにちは」と同様「たもうた」が適当と考えている。ほかに，「而して」の代わりに，「それに加えて」などと，表現をより明確にした。とはいえ，触りすぎると宗教的雰囲気などが破壊されるので，抑えたつもりではある。靈界物語の該当巻号や章番号について：

神系の時代別活動を明らかにしたものであります。

一 天地剖判と主宰神決定³

天之御中主大神（一名大国常立尊）⁴、高皇産靈大神、神皇産靈大神は、無限絶対無始無終の神力を發揮して、大宇宙を創造したまい⁵、我が宇宙⁶に大国常立尊の分霊を下して、修理固成の神業を命じたまうた。神命を遵奉して、国祖国常立尊（一名国治立尊）は豊雲野尊（一名豊国姫命）を補佐神として天地を剖判し太陽太陰星辰を創造したまうた⁷。

それに加えて、太陽の靈界は伊邪那岐命、その現界を撞の大神（天照大神）が主宰したまい、太陰の靈界は伊邪那美命、その現界は月夜見尊これを主宰したまうた。さらに、大地の靈界は国祖自ら主宰したまい、その現界（大海原、

本報告の特に前半は参照資料番号になっていて、その資料が当方の手許にないので意味を成さない。おそらく、講演時には受講者個人には給付されず、抜粋資料の部数は限られていたものと思われる。そこで、監修者は、すべての参照資料を特定するのに、靈界物語の巻号と章番号などで示すことにした。その際、飯塚弘明氏が構築運営する靈界物語.ネット <https://reikaimonogatari.net/index.php> と検索機能を利用させて頂いた。ここで感謝したい。表現の補足：監修者が靈界物語を把握していないために理解できない部分も多々あった。本報告書の読者を私程度の方々と想定し、木庭次守の記述する部分について、靈界物語と『靈界物語ガイドブック』（木庭次守編、木庭元晴監修、2010、八幡書店）にあたって、補足した。² 編者木庭次守の執筆態度は、奇をてらわないこと、現体制の諸矛盾をことさら明らかにしないことである。深く読むとそれがよくわかる。この神系表の仕組みを理解しようとする姿勢があれば、それは明らかになる。『靈界物語』が口述筆記されたのは、第一次大本事件と第二次大本事件の間にあり、官憲またはそれに取り込まれている人々の監視下であり、出口王仁三郎の伝えたいことを知りつつ、それを敢えて表に出さないのが、木庭次守の執筆姿勢である。しかも、事件の弁護資料の作成という「時の要請」があった。その執筆や言動の姿勢は、事件解決後も昇天まで続けられた。

「天之御三体之大神」は古事記との関係を示すために必須のものである。明治維新後の神社の多くで、天皇制のもとで、中軸神として天照大神が祀られているので、天照大神は神道関係の教団としては無視できない、圧力としてあったものと思われるが、この点についての出口王仁三郎の本音は、若い木庭次守も『靈界物語』を通じて理解していたであろうが、靈界物語を赤子の心で読んで書かれているままに記述したと、付記しているのである。

³ 活動表の最上部の、造化三神、天之御三体之大神、に該当している。

⁴ 天御中主神は大国常立尊だった。高皇産靈大神、神皇産靈大神の役割は、靈界物語第 47 巻総説、さらには天祥地瑞にある。

⁵ 詳細は天祥地瑞に記されているが、靈界物語では、第 1 巻第 20 章「日地月の発生」にあたる。

⁶ 我が宇宙とは、銀河系を含む一つの空間的に連続する領域になる。多数のこういった宇宙が存在することは天文学の理論上、受け入れられている。

⁷ 「宇宙創造」のレイヤーには、国常立尊と豊雲野尊が並べられている。靈界物語中に、「宇宙創造」という用語はない。我が宇宙では、国常立尊と豊雲野尊が宇宙創造>修理固成+天地剖判を実行したと筆者（木庭次守のこと、私木庭元晴が記述する上で、木庭次守は編者というよりも筆者と考えた方が混乱が無いと考える）はまとめている。造化三神は、神界、現界、幽界の三界すべての嚆矢である。

物質界)は、日の大神(伊邪那岐命)と国祖の命によりて、素盞鳴尊が主宰したまうた⁸。 参照：霊界物語第1巻第3編「天地の剖判」pp.113-148。

二 国祖の神政より御隠退まで⁹

ここに国祖は、豊国姫尊を内助の役として、地上神界を至善至楽の天国たらしめんとして、神政を開きたまう事となった。

まず稚姫君命を生みたまうて神政の司となし、大八洲彦命を天使長兼宰相として聖地エルサレム(現今のトルコのエルセレム)の地の高天原¹⁰龍宮城に神務と神政を開きたまうた。

しかるに、日の大神の直系にして、太陽界より伊邪那岐尊のご油断によりて手の俣より潜り出で、現今の支那の北方に降誕したる温厚無比の正神、盤古大神塩長彦命を擁立して国祖を隠退せしめ、盤古大神を地上神界の総統神たらしめんとする一派が生じた¹¹。 参照：同巻第18章「霊界の情勢」pp.98-105。

⁸ 活動表には、大地の靈魂として金勝要神がリストされているが、この「説明書」には触れられていない。素盞鳴尊は、国常立尊と伊邪那岐尊の命によって地上現界主宰神となっており、地上現界を重視する観点からすると、順位として、国常立尊、日の大神(伊邪那岐尊)に続く存在であることが示されている。金勝要神は稚姫君命の第五女として生まれるが、地上現界の主宰神素盞鳴尊の補佐役となるので、監修者は、活動表では素盞鳴尊のレイヤーに並置されているものと考えた。

活動表は神殿に向かって拝む者の見え方に従っている。向かって右手が神殿からすると左手、つまり上座になる。「天の御三体の大神」というタイトルの下には、それに該当する神々が並んでいるが、これによると右側から、伊邪那岐尊、天照大神、伊邪那岐尊、そして、素盞鳴尊も入っている。

さて、『霊界物語』第1巻第3篇天地の剖判第22章国祖御隠退の御因縁には、「そこで国常立尊はやむを得ず天に向かつて救援をお請ひになつた。天では天照大御神、日の大神(伊邪那岐尊)、月の大神(伊邪那美尊)、この三体の大神が、地の高天原に御降臨あそばし給たまひ」とあり、『霊界物語』では「天の御三体の大神」には、素盞鳴尊が入らない。この活動表でも、大洪水イベントの後の、「天の御三体の大神降臨」には、「天照大御神(一名撞の御柱大神)、伊邪那岐尊(一名天の御柱大神)、伊邪那美尊(一名国の御柱大神)」に限られている。以上のことから、「天の御三体の大神」のタイトルには、「天の御三体の大神」およびそれに匹敵する神々が並べられていると考えて良いであろう。つまり、幽の頭にあたる神々である。

⁹ 活動表の、国常立尊の神政、にあたる。このすぐ下に、霊主体従(ひのもと)、と横見出しがあつて、地上神界の神人のあるべきテーゼが示されており、この霊主体従は国常立尊の神政の根幹である。国祖国常立尊と豊国姫尊から地上神界に稚姫君命が生まれる。地上神界幽界の主宰神は国常立尊であるが、素盞鳴尊系の大八洲彦命が天使長として補佐する。舞台は地上神界のエルサレムである。

¹⁰ 霊界物語小事典p.118「地の高天原」には、国祖国常立尊の鎮座される神都で、天神地祇の神集いたまう神聖霊場とある。太古はトルコで、今日は綾部の大本、などがあり、地上現界にも対応していることがわかる。

¹¹ 地上霊界主宰神国祖と太陽霊界主宰神日の神の命によって地上現界を主宰する霊主体従の素盞鳴尊に対して、太陽霊界主宰神日の神から生まれた体主霊従(われよし)の盤古大神塩長彦命一派が主宰神に取っ

盤古大神の肉身の子なる八王大神常世彦命は、稚姫君命の第三女常世姫¹²を妻神として常世国（北米大陸）に居を定めていた。（第2巻「総説」）

他方、天王星より地上（常世国）に降誕したる豪勇の神、大自在天神大国彦命（神典にては大国主神）の一派があった。

地の一方には天足彦、胞場姫の体主霊従の行動の結果、邪気凝りて、八頭八尾の大蛇（ウラル山）、金毛九尾白面の悪狐（印度青雲山）、六面八臂の邪鬼（ユダヤ）の三種の悪霊が発生した。

常世彦には八頭八尾の大蛇が憑依してこれを守護し、常世姫には金毛九尾の悪狐が憑依して保護し、大自在天神には六面八臂の邪鬼が憑依して守護していた。国常立尊は霊主体従『ひのもと』で、盤古大神は体主霊従『われよし』、大自在天神は力主体霊『つよいものがち』である。

さて常世彦命は国祖を隠退せしむる計画の謀主となり、常世姫命とともに大自在天神の力をかりて、常に魔軍をして、国祖大神を始めその従神を非常に悩ましたのである。

国祖はここに豊国姫尊と凶り天道別命¹³とともに天地の律法を制定し、天の御三体の大神様のお許しを頂いて、天上地上に喧伝したまうた。すなわち国祖は神命により太陽界に¹⁴使神となり、日天使国治立命と称され、豊国姫尊は月天使国大立命と名づけられ、かつ日天使の神業を国直姫命に月天使の神業を豊国姫

て代わり、さらには国祖を隠退せしめる流れが生まれた。活動表には省略されているが、国常立尊の神政の前に混沌があり、それから離脱するべく、国常立尊の神政が始まった。

活動表通りであれば、日の神のご油断によりて手の俣から、現今の支那の北方に盤古大神が生まれたという記述からすると、言うに言われぬ歴史の省略があるように思える。

¹² 稚姫君命と天稚彦との間に三男五女がある。稚姫君命の再来とされる大本開祖出口直も三男五女を得ており、第三女は福島ひさ、第五女が二代教主出口すみ子。稚姫君命の名前表記は第1巻で終了し、同命が第2巻では、総説 p.3 から稚桜姫命と表記されている。そして同巻第7篇「天地の大道」第45章では、国治立尊と豊国姫尊によって、天地の律法が制定される。このうち、外面的の律法の「第一に、夫婦の道を厳守し、一夫一婦たるべきこと。」(p.233)に稚桜姫命は違反する。「このとき国治立命は神姿を現あらはし、二神司の前に立ち、『夫婦の戒律を破りたる極重罪ご悪神なり。天地の規則に照てらし、天稚彦、稚桜姫命は、すみやかに幽界にいたり、幽庁の主宰者たるべし』と厳命された。地上を治め、その上、天上にいたりて神政を掌握さるべき運命の神、稚桜姫命は、やがては天より高く咲く花の、色香褪せたる紫陽花や、変ればかはる身の宿世、いよいよここに、二神司は地獄の釜の焦起し、三千年の、忍びがたき苦しみを受けたまうこととなつた」(第1巻第21章 p.240-241)とある。

天地剖判のはじめに、「それから大神（大国常立大神）は天の太陽、太陰に向はせられ、陽気と陰気を吸い込みたまうて、息吹の狭霧を吐き出したまうた。この狭霧より現はれたまへる神が稚姫君命である。」(第1巻 p.128)とある。

¹³ モーゼ

¹⁴ 「太陽界に使神となり」の「に」に違和感を覚えるが、霊界物語の表現に一致している。霊界物語小事典の「にってんし」には、「天地の律法を太陽界に伝達する使神としての国常立命の聖職」とある。これから、「天地の律法を太陽界に伝達する使神」を表現するために、「太陽界に」が使われていることがわかる。

命¹⁵に委任された¹⁶。 参照：霊界物語第3巻第1章「神々の任命」。

国祖大神は、天上地上に天地の律法を宣伝する官掌の神として、十六神将を天使に任じ宣伝を命じたまうた。 参照：霊界物語第3巻第1章。

この時期、稚姫君命は夫婦の道を誤り、律法の犠牲となって幽界に降られたのである。 参照：霊界物語第2巻第43章「魔風恋風」～第46章「天則違反」。

国祖大神は、邪神の憑依する常世彦命、常世姫命、大國彦命の行動によって地上が混乱することを憂慮したまい、太白星より下りし十二個の玉を国魂として、世界の各地に配置し、守護神として八頭神を任命し、その主権者として八王神を十六天使のうちより十二柱を選んで配置したまうた。 参照：同巻第二章「八王神の守護」。

しかるに、盤古大神系たる常世彦一派は大國彦命とともに八王神八頭神を操縦し、ついに聖地の宮殿を破るなどの暴挙に及び、大八洲彦命以下の天使は天地の律法をやむなく破りて、配所に隠退さるるに至った¹⁷。 参照：霊界物語第3巻第43章「配所の月」。

加うるに、邪神の憑依せる盤古系と大自在天神系の神々の暴動はついに天使長及び天使を更迭すること数回（大八洲彦—高照姫命—澤田彦命—広宗彦命）に及んだ。常世城での八王大神常世彦一派の大陰謀を暴き国祖神政の成就に貢献した筈の至誠史実の大道別などの神人達ではあったが、この神人にこそ天地の律法『欺むく勿かれ』が適用され、その責は国祖大神に及んだのである。悪神の改心を期待して桃上彦命を広宗彦命に嗣ぐ天使長とするなど悪神を重用するという国祖大神の至仁至愛の神慮に流石の悪神も感泣悔悟して、常世彦命のごときは八王大神の名称を撤廃し天使八王神を拝命し常世国の守護職となった。参照：霊界物語第4巻第32章「免れぬ道」～第34章「紫陽花」。

¹⁵ 霊界物語小事典の「がってんし」には、「太陰界への律法伝達の使神としての豊国姫命の聖職。神業は国大立命に委任さる」とある。素盞鳴尊=国大立命=豊国姫命=月夜見尊となり、ことさらに他神にゆだねる必要性はないように思われるが、活動によって神名が変わることが示されているのである。

¹⁶ この段落について、元々は霊界物語第3巻第1章と、「豊国姫命」の表現は一致している。ただ、豊国姫について、すべて命を使うと、循環してしまう。そこで、3回出ている豊国姫について、はじめの二つの豊国姫については、「命」を「尊」に変更した。

¹⁷ この章「配所の月」には、国祖自らも隠退の道を歩む予兆が示されている。「この四神将は元来国大立之命、天神の命を奉じて大海原の国を知食めすべく、その精靈魂を分かちて神界の守護に当たらせたまひしものにして、大八洲彦命は和魂であり、言霊別命は幸魂であり、また、大足彦命は荒魂であり、神国別命は奇魂である。」とある。素盞鳴尊は、大海原つまり地上現界を知食めすためにも、天の御三体の大神の命によって、地上神界の守護が委任されているということが了解される。悪魔跳梁する地上神界には、至善至直の国祖と素盞鳴尊の豊かな仕組が鍵になることが示されているとも考えられる。霊界物語第5巻総説「嵐あらしの跡」には、素盞鳴尊=王仁三郎の国祖への敬愛の思いが記されている。

さらに、桃上彦命の失政により、ついには国祖の神勅によって、常世彦命は天使長となって神政に従事している。 参照：霊界物語第4巻第37章「時節到来」。

常世彦命没し、その子高月彦命天使長になり、常世姫の後を承けて、長女初花姫命、龍宮城の主宰神となり、常世彦命、常世姫命と改名するや、常世彦命には八頭八尾の大蛇憑依し、常世姫命には金毛九尾の悪狐が憑依して守護し、ついには国祖大神に迫りて八王大神の称号を獲得し、加うるに正しき神々を、根の国に退去せしめ、その上、余りに分不相応な野心を起し、天の若宮にます御三体の大神に直願して国祖大神を根の国（幽界）に退去せしめた。されどその精霊は地上の神界なるエルサレムの東北（艮）、七五三垣の秀妻国（日本）にとどめさせたまうた。豊国姫命も夫に殉じて聖地より西南（坤）の島国に退隠された。ここに艮の金神、坤の金神の名称が起こったのである。 参照：同巻第45章「ああ大変」。

三 盤古大神の神政

ここに八王大神常世彦命は多年の宿望を遂げて、天の御三体の大神の命をうけ、聖地エルサレムに盤古大神を奉じて、地上神界の総統神と仰ぎ、自らは神政総攬の権を握っていた。しかるに、温厚篤実にして至誠至美なる盤古大神のエルサレムの宮殿に居ますことに常世彦命は何となく窮屈を感じ、エデンの園に宮殿を造りて、これに転居を乞い、体良く敬遠し、常世彦命はますます和光同塵的神政を行った。 参考：霊界物語第5巻総説「嵐あらしの跡」、第2章「松竹梅」。

しかるに、大地の主権神たる国祖大神の威霊の抜け出でたる天地は、奇怪なることのみ続出し、ついには神怒にふれて、エルサレム、龍宮城、エデンの園の宮殿はほとんど焼尽し、命辛々ウラル山、アーメニアへ遁走し、ウラル山上に神殿を造り、ここに神政を開いた。 参照：霊界物語第5巻第10章「奇々怪々」

¹⁸ 同巻同章には次のようにある。「吁、かくの如く到るところに異変怪事の続発するは、大地の主権神たる国祖を退隠せしめ、地上の重鎮を失ひたるがために、たとへ日月は天上に輝くといへども、霊界はあたかも常暗の惨状を誘起し、邪神悪鬼の跋扈跳梁に便ならしめたためである。これより地上の神界は、日に

この消息を窺知したる大自在天神の従神大鷹別は、八王大神より預かりたる常世城を占領し、大自在天神を総統神と仰ぎ常世神王と改称し、自らは大鷹別神と名のって盤古大神に対し、無名の戦端を開いた。

このことを知ったる常世彦は、常世神王と類似するわが神名を改称する必要に迫まれウラル彦と改称し、常世姫はウラル姫と改めた。そして盤古大神を盤古神王と改称した。ここに全く地上の神界は盤古系と大自在天系の勢力二分して混乱に混乱を極め、この時こそは実に天下は麻のごとく乱れてどうともすることが出来なかった。

各山各地の八王神八頭神は今更のごとく悔悟して、一日も早く天地創造の大原因たる神霊降下して、善美の神政を樹立したまへと、国魂の宮に詣でて祈るのみであった。大蛇、悪狐、邪鬼の悪霊は時こそ到れりと、縦横無尽に暴威を逞しうしたのである¹⁹。以上参照：同巻第 17 章「勢力二分」。

この状況を陰ながら窺いたまいし国祖大神は野立彦と変名して、木花姫命の鎮座ます天教山（現今の富士山）に現れたまい、豊国姫命は野立姫命と変名して高照姫命の鎮座ますヒマラヤ山（一名地教山）に現れたまい、その神命により、木花姫命と高照姫命の両神は正しき神々を集めて、二柱の神の神勅を宣示したまい、天下の神人を覚醒すべく、預言者として世界の各地に派遣された。参照：同章「勢力二分」、同巻第 27 章「唾の対面」。

集まった諸神人は言触神となって、あるいは童謡に、あるいは音楽に、演芸にことよせて、神界より世界救済のために千辛万苦国祖の預言警告を宣伝した。しかるにその警告の真意を研究し、日月の神恩を感謝し身魂を錬磨せんとする神はほとんど千中の一にも当たらなかった。参照：第 5 巻第 18 章「宣伝使」。

とはいえ、常世神王は預言者の言葉を聞いて改心し、ロッキー山上に仮の宮を建て、日月地神を祭祀した。参照：同章「宣伝使」。

さらに、ウラル山の盤古神王も日の出神の宣伝歌に改心して、ウラル山上に神殿造営の上、神霊を祭祀し、日の出神を賓客として、生神のごとく尊敬した。参照：同章「宣伝使」、第 19 章「旭日出暗」。

ウラル彦夫妻は改心するところなく、ますます体主霊従的行動を続け、ついには神々の迷いを解くためにとて、宣伝歌を造り盛んにこれを四方に宣伝して、日の出神の宣伝歌を抹殺してしまった。これより盤古神王とウラル彦夫妻の間

月に妖怪五月蠅のごとく群がり起こり、收拾すべからざる常暗の世を現出した。」とあるように、国祖隠退前にはいわば空気のような存在だった環境が国祖あつての存在であったことを知るのである。

には深き溝渠が穿たれた。 参照：同章「旭日出暗」。

ウラル彦神は五倫五常の道を忘却し、氷炭容れざる盤古神王を短兵急に攻め寄せた。天地の大恩を悟りし盤古神王は無抵抗主義を実行し、日の出神に守られて荒れ果てた聖地エルサレムに難を逃れ、形ばかりの宮殿に天地神明を祀り、盤古神王は総統神、日の出神は輔佐として神務と神政を復活し、世界の混乱鎮定の祈願に余念無かった。 参照：同巻第 46 章「油断大敵」。

ここにウラル彦神は、ついに盤古神王と自称するに到った。それに加えて、常世国に攻め寄せ常世神王に基準を迫ったが偽盤古なること露見し、一言の下に要求を拒絶された。ここに両軍は猛烈に戦った。連日の雨は激しく暴風凄すさまじく、ついには太平洋から津波が襲いきたって、常世城は水中の没せんとした。常世親王は大いに驚き天教山の大神に祈って救われたが、ウラル彦神の魔軍は大半滅び、命からがらウラル山頂へ遁走した。参照：同巻第 47 章「改言改過」。

四 大洪水と天津神の神政

天地変動して五百六十七日の大洪水と大地震の結果、世界各地の山々も水中に沈み、わずかに大高山を残すのみとなった。 参照：霊界物語第 6 巻第 15 章「大洪水（一）」。

そのとき、龍宮城の三重の金殿よりうつくしにたま顕国玉の神威発揚して、あたかも両刃の剣を立てたるごとき黄金の柱中空に延長し、その末端より発生したる黄金橋はこの柱を中心に東西に延長し、その少し下方より左右に銀橋を発生し、そのまた下方部よりは銅橋を発生して東西に延長し、地球の上面を覆うたのである。宣伝使の言葉を信じた神々は尽く、金橋、銀橋または銅橋に救われた。盤古親王、常世親王も金橋の上に救われている。 参照：第 6 巻第 16 章「大洪水（二）」、霊界物語第 5 巻第 24 章「天の浮橋」。

極善の神は天教山、地教山に救われ、極悪の神はアルタイ山に救われた。鬼の目にも見落としか、あるいは宣伝使の経綸もあってか、ウラル彦神夫妻はアルタイ山に救われた。参照：第 6 巻第 16 章「大洪水（二）」。

今まさに地上の蒼生は、尽く亡びんとするとき、野立彦命、野立姫命は、大國治立尊、日の神と月の神の精霊に祈りて、天教山の噴火口に投身したまい、もって地上の万有に代わりて責を負い、一切の蒼生草木禽獸虫魚に到るまで、残らず救わせたまうた。 参照：靈界物語第6巻第17章「^{きよくじんきよくとく}極仁極徳」。

この変動によって大地はやや西南に傾斜した。この惨状を見たまいし造化三柱の大神は、伊邪那岐尊、伊邪那美命に命じ給い、天の瓊矛を賜いて天の浮橋に立たしめ、地上の海原を搔きなさしめたまうた。この神業により数年を経て洪水減じ、地上は再び元の陸地を現わした。 参照：同巻第18章「天の瓊矛」。

ここに造化の神の命を奉じて、天の御三体の大神は、天教山の青木ヶ原に降臨したまい、天照大御神（撞の御柱の神）を真木柱として^{みとのまぐはひ}美斗能麻具波比の神業を開始したまいて、国生み、神生み（国魂の配置）、人生み、山河百の草木の神を生み成したまうた。 参照：同巻第19章「祓戸四柱」、第21章「真木柱」、第24章「富士鳴戸」。

ウラル彦神は大洪水によりて改心してウラル山に帰り、アーメニアに神都を開き、天地変動後の救いの神として人々の尊敬深かりしが、再び邪神に憑依されて色食の道に耽溺し、体主霊従的行動を開始するに到った。この偽盤古親王は、盤古親王がこの世界の最大権威者であり盤古のすべての命令に服従せよという大中教（ウラル教の前身）を開いたが、宣伝使が極端なる個人主義の教理と誤解して布教し、葦原の瑞穂国（地球上）にあまねく拡がり渡り、^{おほやまくひのかみ}大山杵神²⁰

や^{のづちかみ}野槌神²¹などがのさばり、^{かなやまひこ}金山彦²²、^{かぐつちかみ}迦具槌神²³、^{おほげつひめのかみ}大宜津姫神²⁴、^{とりぶねのかみ}天の鳥船神²⁵

など²⁶の体主霊従的の神々が地上各所に顕現した。 参考：同巻第31章「^{つづれ}襪の

²⁰ 第30章「罔象神」では、山を占領する大地主。

²¹ 第30章「罔象神」では、原野田圃の大区劃を独占する大地主。

²² 靈界物語小事典から、金銀為本のやりかた。黒鉄文明。

²³ 靈界物語小事典から、火力文明。

²⁴ 靈界物語小事典から、他者を犠牲にして衣食住に贅を尽くす体主霊従的風潮。

²⁵ 第30章「罔象神」では、銅鉄などを山から採掘して他を滅ぼすために飛行機などを造る軍国主義。

²⁶ あまりにくだくだしいので主なもの以外は省略した。裁判資料として作成されているので、著者木庭次守は、古事記の新しい解釈や引用を重視したものと考えられる。

錦」。

天の御三体の大神のご活動で完全無欠の神国が樹立されたのだが、人は溢れ、優勝劣敗弱肉強食の暗黒世界が再現し、神伊邪那美命は地上神人の統御に力尽きたまいて、^{よもつ}黄泉国に^{かむき}神避りたま^い27、世は国治立命の御神政に比して数十倍の混乱暗黒世界となった。天下の神人も一般の人間も救世主の出現を希望することとなってきた。ときに、伊邪那美大神のご神業を補い奉るべく、野立彦命、野立姫命の神命を奉じて、黄金山（聖地エルサレムの橄欖山）下に、最も虐げられたる人間の中から埴安彦神、埴安姫神二神が現れたま^い、^{あなないきょう}三五教を開設し、仁慈の神々を多く率いて救いの道を宣伝し、正しき人間を多く救うた。されどその数は千中の一にも足らなかった。参照：同巻第 30 章「^{みづは}罔象神」。

さて、日の出神に励まされ、エルサレムの聖地に神政を復活したる真正の盤古神王は、日の出神に守られて地教山に身を隠し、後には国祖の従神、紅葉別命が盤古神王と称して天下の形勢を覬望しつつあった。（第 7 巻第 1 章）²⁸ 参照：霊界物語第 7 巻第 1 章「日出山上」。

日の出神は、天教山の伊邪那岐大神、木花姫命の神勅を奉じて、世界各地に神教を宣伝し各国魂を定め、神柱を養成するための活動を続けられた²⁹。参照：霊界物語第 7 巻，第 8 巻，第 9 巻。

霊界物語第 10 巻第 15 章「言霊別」の最終段落を次に引用する。「天地の神人は、此周到なる御経綸を知らず、伊邪那美命は黄泉の国に下り給ひしものと固く信じ居たるに、伊邪那美命のロッキー山に現れ給ふとの神勅を聞くや、得たり賢しとして元の大自在天にして後の常世神王となりし大国彦は、大国姫その他の部下と謀り、黄泉島を占領して、地上の権利を掌握せむとしたれば、大神

²⁷ 霊界物語第 10 巻第 15 章「言霊別」には、この伊邪那美命の「周到なる御経綸」が説明されているが、詳細をのべることで読者の理解が難しくなると考え、いわば戯画的ストーリーの方が採用されたものだろう。

²⁸ 霊界物語の巻号と章番号がここから記述されるようになるが、参照情報の形を取ることにする。

²⁹ 霊界物語小事典には次の説明がある。伊邪那岐尊の御子で大道別としてモスコウの宰相神であったが、神命を奉じて、世界各地の邪神の陰謀を調査し、神界の経綸を守り、常世会議の責を負うて竜宮海に投身。国祖大神はその荒魂と奇魂に日の出神、和魂と幸魂に琴平別神と名づけたまうた。これより陸上では日の出神として、海河では琴平別神として、神界経綸の完成に奉仕したま^い、国祖の再現にあたっては聖地に出現して地盤の太柱となる。神機発揚の神である。なお、木庭次守編（1955）の『新月の影』p. 139 では、「大道別の命は王仁のことである。大道をわけてきたのは王仁だから。」とある。

は遂に前代未聞の黄泉比良坂の神戦鬼闘を開始さるるに到りたるなり。この戦は、善悪正邪の諸神人の勝敗の分かるる所にして、所謂世界の大峠是なり。」

大洪水の前に野立彦と野立姫によって言触神が派遣され、常世神王大国彦命らは改心したにもかかわらず、またもや八頭八尾の大蛇に憑依されて常世国ロッキー山に立て籠もり、従神広国別、広国姫を常世神王と偽証せしめ、自らは日の出神と僭称し、大国姫も邪神（金毛九尾の悪狐）に憑依され、畏れ多くも伊邪那美大神と僭称し天下の神人を迷わしめ、天教山の伊邪那岐大神、伊邪那美大神に対抗して、数多の邪神を率いて黄泉島へ出陣することになった³⁰。 参照：霊界物語第 10 卷第 13 章「蟹の将軍」。

五 黄泉比良坂の戦いより岩戸開きまで

天教山にまします伊邪那岐大神は、木花姫命、日の出神に魔軍を言向け和す（正しき誠の言葉によって改心せしむること）べく命じ給い、日の出神は三軍の将として三五教を信奉せる正しき神人（宣伝使）を引率して黄泉島に向かつて花々しく進軍した。この神軍の形勢が大なる悲境に陥った際、松竹梅の桃の実現われ来たりて魔軍を言向け和す。 参照：同巻第 21 章「桃の実」。

神軍は天地の大神のお守りによって、誠の言霊（神の言葉、神に通ずる言葉）をもって武器となし、刃に血塗らずして、ついに大国姫命率いる黄泉軍を言向和した。大国彦命などは改心帰順して伊邪那岐大神の命を奉じて、常世国黄泉島を根拠とし八十禍津日神の神業に奉仕し、大国姫命は黄泉の大神となってあらゆる曲神を善道に立ち帰らしめんと努力することとなった。 参照：同巻第 24 章「言向和」。

神伊邪那岐大神は黄泉軍を言向けて凱旋したまい、穢れを洗い清める神業を数多の神々に分掌せしめ、最後に左の御眼を洗って天照大御神をませたまひ太陽界の主宰となしたまい、次に右の御眼を洗いたまひて月読尊（月夜見尊）を生みたまひて、太陰界の主宰となし、いやはてに、豊国姫命の身魂を神格化

³⁰ この段落は、筆者の論文では、「五 黄泉比良坂の戦いより岩戸開きまで」の冒頭に配置されていたが、神系表と対応しないので、この段落を誘因すべく前もって、霊界物語第 10 卷第 15 章「言霊別」の最終段落、を配置して、「四 大洪水と天津神の神政」の末尾に移動した。

して神素盞鳴尊（一名国大立尊）と名づけ、大海原の司に任じたまうた³¹。 参照：同巻第 26 章「貴の御児」。

伊邪那岐大神は日の国の元津御座へ、伊邪那美大神は月の御国へ帰りたいもうた。同巻第 32 章「土竜」。

さて、大国彦命一派の改心の結果、憑依して世を乱したる大蛇、悪狐、邪鬼の霊は、ウラル山、アーメニアに割拠せるウラル彦一派に憑依して、以前にまさる暴動を開始するに到った。ウラル姫命は大気津姫神と現れて、コーカス山に立て籠もり神殿を造営して、国治立大神、金勝要大神、素盞鳴大神の神霊を鎮祭し顕国の宮と称え、この大神たちの神力によって天下を統一せんと計った

のである。 参照：霊界物語第 11 巻第 23 章「保食神」^{うけもちのかみ}。

かかる所に三五教の宣伝使現れて誠の言霊を唱え神力発揮し、ウラル姫はたちまち鬼女と変じてウラル山アーメニア指して遁走し、残った神々は帰順した。参照：同巻第 24 章「顕国宮」。

しかるにウラル彦ウラル姫は、美山彦をウラル彦、国照姫をウラル姫と偽称せしめてアーメニアの神都を死守せしめ、自らは黄泉島、常世国に渡って、アーメニアと相まって、回天の事業を起こさんとし、世界中を荒れ巡ったのである。参照：霊界物語第 12 巻第 1 章「正神邪霊」、第 27 章「航空船」。

さて、神素盞鳴大神は地教山を後にして、コーカス山に降りたまい、ウラル彦ウラル姫の築いた「顕国の宮」を飯成の宮と改め、宮の主とあれまして、両刃の剣を神実^{かむざね}となし、国治立大神、金勝要大神を花々しく鎮祭したまい、天之

児屋根命、太玉命をして、昼夜祭祀の道に鞅掌^{おうしょう}せしめたまうた。 参照：第 11 巻第 24 章「顕国宮」。

³¹ 第 1 巻第 20 章「日地月の発生」の下記の記述との関係をどう考えればいいのか。わからない。「このとき、太陽の世界には、伊邪那岐命がまた霊体の人体姿と現ぜられて、その神をさし招かれる。そこで荘厳尊貴なる、かの立派な大神は、天に上つて撞の大神とおなり遊ばし、天上の主宰神となりたまうた。白色の竜体から発生された一番力ある竜神は、また人格化して男神と現はれたまうた。この神は非常に容貌美はしく、色白くして大英雄の素質を備へてをられた。その黒い頭髪は、地上に引くほど長く垂れ、髯は腹まで伸びてゐる。この男神を素盞鳴大神と申し上げる。（中略）天に沖して月界へお上りになつてしまつた。これを月界の主宰神で月夜見尊と申し上げるのである。そこで大国常立命は、太陽、太陰の主宰神が決まつたので、御自身は地上の神界を御主宰したまふことになり、須佐之男大神は、地上物質界の主宰となりたまうたのである。」 活動表でも『霊界物語』の記述の流れがそのままには示されていないように見える。冒頭の木庭次守の付記には、文章をそのまま拝読して、とされているが、活動表には木庭次守の解釈が反映されているようである。

されど悪神はウラル山、アーメニアを死守して悔るべからざる形勢であった。変幻出没極まり無き魔神の活躍は日に月に猛烈となり、收拾すべからざる惨状を呈するに到った。神素蓋鳴大神は大いにこれを憂いたまいて、母神のまします^{よみのくに}月界に還らんかとまで心を痛めたまいつつあったのである³²。 参照：第12巻第1章「正神邪霊」。

御父神なる神伊邪諾大神、尊の前に現われたまい、『汝は何故に吾が依させる国を守らず、かつ女々しくも泣きつるか』と言葉鋭く問わせたまいければ、神素蓋鳴大神は、『われ、大神の勅を奉じ、昼夜や孜々として神政に心力を尽くすといえども、地上の悪魔盛んにして、容易に帰順せしむべからず。到底われらの非力をもって、大海原の国を治むべきにあらず、吾はこれより根の堅洲国に至らむ』と答えたまいぬ。この時父伊邪諾大神は、『しからば汝が心のままにせよ、この国には住む^{なか}勿れ』と言葉厳しく詔らせたまいぬ。ここに素蓋鳴尊はやむをえず、母のまします根の堅洲国に至らむと思わし³³、天教山の高天原にまします姉の大神に暇ごいをなし、雲霧押分けて、天教山に上らせたまう。

『吾が弟神のここに上り来ませるは、必ず美はしき心こころならざらめ、この高天原を奪はむとの汚き心を持たせたまうならむ』と部下の神々に命じ、防戦の用意に掛からせたまいける。姉の大神は、高天原を占領するの野心あることを厳しく詰問された。ここに神素蓋鳴尊は、『わが持てる十握の剣を姉の命に奉つらむ、姉の命は御身にまかせる八尺の曲玉をわれにわたさせたまへ』として、玉と剣の交換の神業を始めたまい、素蓋鳴尊の神実なる十握の剣より三柱の女神現われたまい、姉大神の御身にまかせる八尺の曲玉より五柱の男神現われたまえば³⁴、ここに神素蓋鳴大神の清く、若く、優しき御心現われたまえり。

³² 素蓋鳴尊が母神のまします黄泉国（月界）に還らんかとお思いになったのは、魔神の活躍故なのかどうか。コーカス山の飯成の宮が充実してきたなか、「白雲別の宣伝使、教えを開き北光の神の司の又の御名、天の目一神司、竹野姫を娶はして、アルプス山に遣はしつ、石凝姥と諸共に、鏡、剣を鍛はしめ、国の御柱樹に給ふ、神縁微妙の神業」（第11巻第24章「顕国宮」）が進むなか、天照大御神のお疑いがあるがほぼとほとほその疑惑癖に嫌になって、還らんかとお思いになったということが、文脈上、想像されるのである。

³³ 素蓋鳴尊と伊邪那岐命の距離は、素蓋鳴尊と伊邪那美命の距離に比べて、大きいことを示唆している。大洪水後の伊邪那美命の黄泉国に神避ります場面と、この素蓋鳴尊の気弱さには共通点が見られるのである。

³⁴ 神系表には誓約として、十握の剣から現れた三柱の女神と、八尺の曲玉より現れた五柱の男神の全名前と、霊界物語に現れた神名がすべて記されている。これらの神名は霊界物語第12巻第4篇古事記略解第29章「子生の誓」に現れたものがほぼ優先されている。この古事記のオールキャストが示されているのも、裁判に関わったことであろう。

姉大神はここに弟神のお心を智りたまいぬ³⁵。

されど晴れやらぬは、神素盞鳴大神に仕えまつれる八十猛の神々の御心なりき。この八十猛の神々の無謀なる振舞いによりて、天照大御神は天の岩戸の奥深く隠れたまい、再び六合暗黒となり、万妖悉く起り、草の片葉に至るまで、言問いさやぐ悪魔の世が現出したのである。

ここに高天原にまします、思慮分別最も深き神と聞こえたる、金勝要大神の分霊思兼神などの努力で、再び清明に輝きわたることを得たのである³⁶。以上参照：第15巻第10章「神楽舞」。

バラモン教の由来やその後の流れについては、説明の流れから著者木庭次守は次の章「六 天の岩戸開きの後」に示されている。これを監修者は著者の三神系時代別活動表に合わせるべく、文脈を考慮した上で、この第五章の最後に付け加えることとしたい。

コーカス山から常世の国に逃れたウラル彦夫妻は、大国彦命の子である大国別命を擁立して、バラモン教を開設した。バラモン教主祭神は大自在天大国彦命で、その子大国別命が教主となり、ついに海を渡りアフリカエジプトのイホの都に教えを開いた。この時は三五教の宣伝使夏山彦の神力に恐れて遁走し、メソポタミアの顕恩郷に根拠を構えた。ここで大国別命没し、その子国別彦命は左守神たりし鬼雲彦に追放された。この顕恩郷で大棟梁となった大黒主勢は黄金山をも揺るがす勢いになった。さらに三五教の言霊神軍によって大黒主は波斯の国、月の国を横断し、自転倒島の中心大江山に立て籠もった。この大黒主と三五教の対立については霊界物語の多数の頁を裂いて展開されている。参照：第15巻第1章「巖窟の邂逅」、第3章「十六花」、第39巻第1章「大黒主」、第40巻「総説」。

³⁵ 古事記の誓約場面の実際のエピソードとして、霊界物語第12巻第16～26章に示されている。月雪花の宣伝使が鎮まる三つの島で、天の岩戸開きの神業が行われる。八尺の曲玉から現れた五柱の男神が、十握の剣から現れた三柱の女神の愛善の言霊を知るのである。それが、古事記に示されているアマテラスとスサノオの誓約(うけい)という王仁三郎の主張はこの裁判資料では省略されている。

³⁶ 古事記そのものではなくて、古事記に則っているが、王仁三郎の解釈が含まれる。著者木庭次守は、裁判の関係者への教育的視点もあるかと思われる。余りにくくだしい部分があって、監修者は一部を省略している。

六 天の岩戸開きの後

ここに八百万の神はこのたびの事変を以て神素盞鳴尊の罪に歸し、手足の爪まで抜き取りて、高天原を神退いに退いたまうた。神素盞鳴大神は、今迄の海原の主宰神たる顕要の地位を棄て、心も細き一人旅、国の八十国、島の八十島にわだかまり、世人を損なう八岐大蛇の悪神や金狐悪鬼の征服に向わせ給たまうたのである。 参照：第15巻第10章「神楽舞」。

これより大神は高天原（天教山）を降り、天津神、国津神、八百万の罪咎を身一つに負いて、地教山の母神、伊邪那美命の神勅を奉じて、高国別命

いくつひこねのかみ（活津彦根神）を伴ない、フサ西蔵に下り、さらにウブスナ波斯（ペルシャ）の国産土山脈

のイソの高原に神館を造りいそ齋苑館と命名したまい、八島主命（くまのくすびのかみ熊野樟日神）を館の主として自らは葦原の瑞穂の国（全地球）にわだかまる邪神を言向和さんと活動を開始したまうのである。 参照：第15巻第12章「一人旅」、第19章「第一天国」、第22章「和と戦」。

さて国祖御神政当時、天使として仕えまつりしことたまわけのみこと言靈別命、常世国に再生し

ことよりわけのみことて言依別命となり、齋苑館に参向し、大神の命を奉じて自転倒島（我が国）に來りたまひ、国祖大神の国武彦命と身を下して時節を待つて隠れ居ます蓮華台の辺り四尾山麓に錦の宮を造営し、玉照彦命と玉照姫命は神使として神靈に奉仕したまい、言依別命は教主となりて、三五の聖場を開き、その教勢、自転倒島はもとより遠く海外までも及んだのである³⁷。 参照：靈界物語第15巻第19章「第一天国」～第22章「和と戦」、第16巻第6章「石槍の雨」、第19巻第16章「玉照彦」、第20巻第1章「武志の宮」、第22巻第1章「玉騷疑」、第20

³⁷ 三神系時代別活動表には記されているが、説明書には記されていないので、悦子姫が天真名井嶽の豊国姫尊の御降臨地を探ねた際に得た神勅を次に示す。「我は豊雲野尊、又の御名豊国姫神なるぞ、国治立大神と共に一旦地底の国に身を潜め、再び地教の山に現はれて、大海原に漂よへる国土を修理固成しつ時の至るを待ち居たりしに、天運循環して天津神より此の聖地を我が鎮座所と神定め給ひたり。我は此の地に靈魂を止め自転倒島はいふも更なり、大八洲の国々島々に我が靈魂を配り置きて世を永久に守らむ。」（第17巻第6章「瑞の宝座」）。大本の教えの重要な部分であるが、著者木庭次守は裁判資料としては、重視しなかったことがわかる。

章「三の魂」。

素盞鳴大神の^{やたりおとめ}八人乙女の英子姫は、侍女悦子姫、亀彦とともに、天照皇大神³⁸

の御神勅を奉じて同大神の神殿を^{けんさきやま}剣尖山の山麓、産盥産釜の辺りに造営し奉った。これが伊勢神宮宮殿造営の嚆矢である³⁹。参照：霊界物語第 16 卷第 2 章「暗夜の邂逅」、第 16 章「神定の地」、第 18 章「遷宅婆」。

前章でのバラモン教教主自称大黒主神に遡る。大黒主は天の岩戸開きの前には、素戔鳴尊の八人乙女と太玉命が現れて言霊の神力を輝かし、メソポタミアの顕恩郷から、命からがら遁走する。天の岩戸開きの後、自転倒島にわたり、大江山三国ヶ岳に立て籠もったのであるが、またもや八人乙女の一人英子姫や侍女悦子姫、亀彦宣使、白虎鬼武彦に追われて再びペルシャ方面に逃げ帰り、ついには印度国ハルナの都（現今のボンベ⁴⁰）に落ち着き、バラモン教は旭日昇天の勢いを得た。八岐大蛇の悪霊に憑依されたる鬼雲彦は自ら大自在天神の直系なりと称し、大国彦神または大黒主神と称するに到った。参照：霊界物語 第 15 卷第 1 章「破羅門」、第 4 章「神の栄光」、第 16 卷第 6 章「石槍の雨」、

³⁸ 霊界物語小事典には、天照皇大御神は、大国常立尊（天之御中主大神）の御霊徳の完全発揮の御情態のときの神名とある。この段落は、霊界物語第 16 卷第 16 章「神定の地」の次の部分に由来する。「『吾は天照皇大神（あまてらすすめおほかみ）なるぞ、其の昔此の御山に現はれ、産釜、産盥と俗に称する天の真名井に御禊して、神格を作り上げたる我が旧蹟なり、汝等ら宜敷しく此処に宮殿を造り、我御霊を祀れ、悦子姫の肉体を借りて此由宣示し置く、夢々疑ふなかれ』。亀彦『委細承知仕りました。之より此谷川に身を清め、大神の美頭の御舎仕へ奉り、神霊を奉齋し、天下太平国土安穩の祈願所と定めまつらむ』と答ふれば天照大御神嬉しげに打ち笑はせ給ひ」とある。第 48 卷第 12 章「西王母」には、「高天原の総統神即ち大主宰神は大国常立尊である。又の御名は天之御中主大神と称へ奉り、其の霊徳の完全に発揮し給ふ御状態を称して天照皇大神と称へ奉るのである。」とあり、この伊勢神宮の嚆矢を示した部分での天照皇大神は、大国常立尊ではなく、天照大御神であることがわかる。霊界物語の他の部分でもこの神名の使用例の混乱が見られるが、これは霊界物語口述筆記の頃の日本の神名用例を反映したものであろう。現在の伊勢神宮内宮には、天照大御神が祀られている。

³⁹ 伊勢神宮の嚆矢とする主張は裁判の係わりで強調されている。『霊界物語』としては開祖との繋がりが重視されているがこの裁判資料である説明書には記されていない。

「六 天の岩戸開きの後」の図の作成上、この宮殿造営の時期を確認したい。英子姫と悦子姫は、顕恩郷から邪神のために老朽船で流されて後、天橋立付近の竜燈松の根元に安着する。由良の湊の人子の司秋山彦の館に身を遁れ、ゆくりなくも、父素盞鳴大神および国治立命の御分霊なる国武彦命に面会している（第 16 卷序文）。秋山彦の館に身を遁れる前に、鬼雲彦（大黒主命）の部下に出会うのであるから、先に鬼雲彦（大黒主命）は大江山での勢力が確立している。天の岩戸開きの後の素盞鳴尊が神追いに遭って後、ウブスナ山脈に滞在しているという情報を得て、亀彦が齋苑館に訪問するが素盞鳴尊は自転倒島に向かったということ聞き自転倒島に辿り着いて、英子姫と悦子姫に剣尖山山麓で邂逅する。そして、天照皇大神から神宮設営の神勅が降っている。言依別命が錦の宮を造るのはその後である（第 20 卷第 1 章「武志の宮」）。

⁴⁰ 現在のムンバイ

第 10 章「白狐の出現」、第 39 卷第 1 章「大黒主」。

さて鬼雲彦に追放されたる大国別命の子、国別彦命は各地を漂泊して、ついには印度国錫蘭島（シロの島）に渡り、国人に推戴されてサガレン王となり、素盞鳴大神の娘神君子姫を妃となして、三五教を奉じて善政を施したのである。参照：霊界物語第 36 卷全。

自転倒島では鬼雲彦逃走後、言依別命が錦の宮を造営し、三五教を開かれたことは前記の通りである。神素盞鳴大神は、コーカス山の飯成の宮、ウブスナ山脈の斎苑の宮殿、自転倒島の錦の宮など、曲神の根城を三五教の拠点に替えて、正しき神々を呼び集い宣伝使を養成して天下に派遣し、四方の曲神を言向け和さんと、三五教の神教を宣伝せしめたまうたのである。

さて、大中教の後身、ウラル教はウラル彦夫妻が常世国へ渡りバラモン教を開設してより、ますます衰えていた。しかるにウラル彦神の落胤たる常暗彦は印度国デカタン高原のカルマタ国に根拠を構えその勢力を次第に盛り返しバラモン教の教勢を脅かすに到った。

しかるに神素盞鳴大神はいかなる神策あってか、印度国には一指もふれられなかった。そのため、鬼雲彦はようやく月の国のハルナの都にバラモンの基礎を固め、大黒主と改名して、印度七千余国の刹帝利を大部分味方につけ、その威勢は日月のごとく輝き渡りつつあった。たほう、ウラル彦、ウラル姫の初発に開きたる盤古親王を主祭神とするウラル教の教徒は四方八方よりいつとなく集まり来たって、ウラル彦の落胤なる常闇彦を推戴して、デカタン高原の東北方にあたるカルマタ国にウラル教の本城を構え、本家分家説を主張し、「ウラル教は常暗彦の父ウラル彦の最初に開きたまひし教えであり、バラモン教は常世国で後に開かれた教えゆえ、教祖は同神である。ただ主斎神が違うに過ぎない。ウラル教はどうしてもバラモン教を従えねば神慮に叶わない。まずはバラモン教を帰順せしめ、一団となって神力を四方に發揮し、次いで三五教を殲滅せんものと、ウラル教の幹部は息巻きつつあったのである。バラモン教の大黒主神はこの消息を耳にし、ウラル教、三五教いずれにも攻め寄せて天下を統一しようとした。ウラル教の本城へは大足別をして、三五教の中心地と聞こえていた斎苑館へは鬼春別をして、数多の勇卒を率い進撃せしめた。参照：霊界物語第 41 卷第 7 章「忍術使」。

それをうけて、神素盞鳴大神は波斯の国ウブスナ山脈の斎苑館に大勢の宣伝使を呼び集めたまいて、ハルナの都の大黒主神に憑依せる八岐大蛇を言向け和さむと、天照大御神の御子日出別神（あめのおしほみみのみこと天之忍穗耳命）を思兼神（議長）として神議りに議らせたまうた。その結果、大神の意思どおり、黄金姫、清照姫の親子の宣伝使を始め、照国別、玉国別、治国別の宣伝使を派遣して、最後に稚姫君命の再来、初稚姫命の宣伝使も先発の神と同様に日出別神のお許しを承けて、大黒主を言向け和すために出発された。参照：霊界物語第39巻第1章「大黒主」～第3章「出師」。

七 ハルナ言向軍⁴¹

（1）黄金姫

おうごん黄金姫⁴²、せいしょう清照姫⁴³の二人は、巡礼姿甲斐々々しく河鹿峠の峻坂を越え進み行く。黄金姫の夫であり清照姫の父にあたるバラモン教の副棟梁鬼熊別の部下五名が待ち伏せしていたが簡単に追っ払ってしまう。

つぎ印度と^{ふき}波斯をつなぐ浮木ヶ原（アフガニスタンの大原野）で休息中、バラモン教の宣伝使大足別の軍隊と衝突する。大足別は打ち倒したが、さすがの母娘も衆寡敵せず、この上は天則を破り寄せ来る兵士を片っ端から打ち殺し暴れんと覚悟を決めた折から、天地も揺るぐばかりの呻り声、森の木陰よりこつ然と現れた数十頭の狼が大足別の軍隊を襲撃した。

⁴¹ この第7章は、三神系時代別活動表に示されたハルナの都への言霊神軍の矢印が具体化されたものである。霊界物語冒頭ともいうべき第2巻では、神祖系で初めて人の形で現れた稚桜姫命（大本開祖）による天地の律法違反と国治立尊による幽界に降るべき神勅が示されている。この第7章の最後には、その後身である宣伝使初稚姫の活躍が示されており、この初稚姫は第72巻まで登場している。第7章には、第6章までに示された三神系時代別活動表のいわば具体的活動例として、地上現界人の活動が前六章に比べると詳細に示されている。初稚姫以外の宣伝使は元バラモン教やウラル教からの改心組であり、木花姫命や北光天使、言霊別などの教育的活動で成長し、生き別れた肉親にも再会するなど人としての幸せを得ている。

⁴² 神素盞鳴尊から^{むかて}蜈蚣姫に賜った名。霊界物語小事典

⁴³ 神素盞鳴尊から^{おうりょう}黄竜姫に賜った名。幼名小糸姫。霊界物語小事典

バラモン軍の逃げ散った後に、照国別の徒弟である国公が追いつく。黄金姫と清照姫を河鹿峠で襲って却って傷ついたバラモン配下の者どもを救うべく、国公は照国別に命じられ、照国別一行から外れて、先の五名のうちのレーブ以外の四名を引き連れている。黄金姫は、照国別一行の窮状を霊眼で知り、国公一行に早く清春山の巖窟に馳せ行くよう指示し、母娘は国公一行と別れて、荒野ヶ原を足早に進み行く。以上参照：霊界物語第 39 巻第 4 章「河鹿越」、第 8 章「母と娘」、第 13 章「浮木の森」。

母娘二人は霧こむる浮木ヶ原を西南指して進んで行く。テームス山の麓で、五人組残りの一人レーブと再会し、レーブが夫鬼熊別の腹心の部下であることを知り彼を案内係と定めて、テームス峠にあるバラモン教春公が守備する関所を無事通過することができた。波斯の国ライオン河を驟馬^{らぼ}に身を任せて対岸に着いた。その時、大黒主の股肱と頼む針彦と久米彦の一隊は何故か、黄金姫一行の姿に眼もかけず通り過ぎた。参照：霊界物語第 39 巻第 17 章「テームス峠」～第 19 章「玉山嵐」。

黄金姫一行は玉山峠にて、またもやバラモン軍のランチ將軍率いる軍隊と衝突し、進退窮まってもはや運命尽きたと覚悟のほぞをかためた時、狼軍幾百とも知れず暴れ入り、ランチを始めとする軍勢は玉山峠を逃げ降った。

葵沼では、黄金姫一行は、照国別一行と出会い、レーブとカルを加え、それぞれ四名となって、それぞれの使命を果たすべく東西に袂を別かった。以上参照：第 40 巻第 10 章「衝突」、第 18 章「沼の月」、第 19 章「月会」。

イルナ^{イルナ}の国の小都会ヨルの都への途中、黒い影が黄金姫と清照姫二人を引っ抱え暗闇に紛れ矢の如く姿を隠した。イルナの都より四、五里隔てて、「大洪水」の際に高照姫が降臨されたという高照山があって、その照山峠の二、三里右手に当たって人間の侵入を許さないという狼の巖窟というのがある。黄金姫と清照姫はイルナの森の少し手前から猿の群に誘われて、この狼の巖窟に進み入った。そこに、あに凶らんや、三五教の宣伝使天の目一つ神司（北光神）と竹野姫夫妻の存在があった。ここに母娘は命により、狼に守られ忠臣とも協力して、神謀奇策により心汚い右守神カールチンをこらしめ、イルナの国の刹帝利セーラン王を救援するなど、印度イルナの国難を救う活躍をする。ちなみに、駒彦は言依別命の命令で右守カールチンの従僕ハルマンとして、すでに三年間、イ

ルナ城の治平に影ながら尽していた。 参照：霊界物語第 41 巻第 1 章「入那の野辺」、第 10 章「狼の岩窟」、第 42 巻第 22 章「別離の歌」。

黄金姫と清照姫は、セーラン王の許嫁だったヤスダラ姫と駒彦とともに、ハルナ城に向かい進むこととなり、レーブ、カル、左守の家来テーマス、かつての妖僧竜雲は別の一隊を組織し、三五教の宣伝歌を歌って各地を巡教しつつ、ハルナの都をさして進み行くのである。霊界物語第 41 巻、第 42 巻。

(2) 照国別

照国別は従者照公、梅公、国公を伴い、河鹿峠にさしかかり、黄金姫、清照姫一行に挑んで却って谷底に投げ込まれたイール、ヨセフの両人を救い、急坂にさしかかって、倒れていたハム、タールの看病を国公に任せて坂道を下っていった。 参照：霊界物語第 39 巻第 5 章「人の心」、第 7 章「都率天」、第 11 章「鼻摘」、第 12 章「種明志」。

河鹿峠を難なく打ち越えて清春山の山麓にさしかかった時、谷底から聞こえる女の叫び声に答えて救えば、その女は照国別の妹菖蒲^{しょうぶ}であった。バラモンによって二人の両親が清春山の巖窟に囚われていることを菖蒲から知り、救援に向かう。だがちょっとした油断で陥穽に落ちてしまった。この後、黄金姫と清照姫の指示に従って戻ってきた国公は、大神の内命で巖窟に信者として化け込んでいた三五教の宣伝使岩彦とともに、照国別一行を救い上げ、照国別は両親の榎谷彦^{かしやひこ}榎谷姫とめでたく再会しえた。巖窟の留守居ポーロ、レールをはじめ、一同の罪を許し、両親と妹を国公に任せて、タール、イール、ハム、ヨセフもその前後を守らしめて、アーメニアの故郷に向かわせた。照国別は大神の使命を果たすべく、照公、梅公および岩彦を伴なって、波斯の国に宣伝歌を歌いながら勇み進んで行く。 参照：霊界物語第 39 巻第 14 章「清春山」～第 16 章「親子対面」。

照国別は岩彦、照公、梅公を従え清春山の巖窟を立ち出でて、西南の原野を跋涉し、ようやくにしてライオン河二三里手前のクルスの森に進んで、神徳の話に時を移すも、バラモン教の鬼春別の部将片彦、久米彦の軍と衝突し、バラモン軍は岩彦の金剛杖に四方八方に逃げ散った。他方、照国別は宣伝歌を歌って、負傷した敵軍を癒やしたのである。

岩彦は駿馬に跨がり、逃げゆく片彦を追う中、釘彦将軍の一隊とも出会って、岩彦一人に弓が射かけられ体一面矢に刺された。首をはねられんとするまさにその時、五七六大神の命により木花姫命が化神時置師神は岩彦を救った。

岩彦の姿はいつの間にやら透きとおり、あだかも鼈甲のごとくなっていた。仏者の文珠菩薩は岩彦の宣伝使の霊である。これより岩彦は月の国を縦横無尽に獅子の助けにより変幻出没し、三五の神軍が危急の場合に現われて救い守ることとなつたのである。 参照：霊界物語第 40 巻第 6 章「仁愛の真相」、第 7 章「文珠」。

照国別は岩彦の所在を失い、彼の行方を求めつつ、ようやくテームス山に上りつめた。頂上の関所頭であった春公の重病を救い、春公は照国別を命の親として道案内となって進み行く途中、春公が岩彦の弟であることが判明したりする。春公は直接岩彦とは会っていないが、うわさに聞いた岩彦と獅子の間のエピソードを語る。ライオン河の名は、その上流の天幽窟に幾百千とも限りない獅子が暮らしていることに由来する。その獅子の二匹の子がおぼれるのを岩彦が助け大胆にも天幽窟まで送り届けたという。それからは岩彦の危難の際には獅子が沢山現れて危急を救うとのことであった。

さて、照国別一行の前に、にわかに一匹の狼が現れた。それに導かれて行くと、バラモン教一派と黄金姫一行との衝突現場に行き合った。その衝突で人事不省となったバラモン十人ばかりの者を救うことになる。さらに、玉山峠を下り、荒野ヶ原を進み、葵の沼の辺りで一泊して黄金姫と清照姫に邂逅するが、前述のように、それぞれの使命を帯びて東西に袂を分かち。 参照：霊界物語第 40 巻第 15 章「氷囊」、第 16 章「春駒」、第 17 章「天幽窟」、第 18 章「沼の月」、第 19 章「月会」。

照国別はバラモン軍の大足別将軍の後を追って地教山方面に向かう途中、デカタン高原のタライ村で、バラモン軍による暴行のために瀕死状態にあった老婆サンヨを救う。そして、サンヨから彼女の二人の娘のうちの妹にあたる一人（花香）は美人ゆえにバラモン軍によって拐かされたことを聞く。姉（ヨリコ姫）の方は先に自ら（玄真坊と）出奔していたから、老婆一人となってしまったのである。この消息を聞き、従者の梅公は花香を取り返すという熱い義侠心を発露する。たほう、バラモン軍通過の数日前には、同じ村の里庄ジャンクの

一人娘スガコ姫や隣村の里庄マルクのせがれ 俣 でスガコ姫の許嫁サンダーという日

頃女装をする美男子も行方不明になっていた。このトルマン国はウラル教を奉じていた。バラモン軍からの攻撃からバルガン城を守るべく、トルマン国トルカ王による義勇軍募集の伝令が里庄ジャンクに届き、居合わせた照国別一行もこの義勇軍に参加することになった。この出発直前、ジャンク宅にオーラ山からやって来た白髪異様の老人シーゴーが、行方不明のジャンクの一人娘スガコ姫を救い出してやるから全財産をオーラ山の生神玄真坊に献納せよと言う。これを聞きつけた梅公は怪しんでオーラ山に踏み込んで正体を確かめる決意をする。里人率いるジャンクや照国別一行はバルガン城に進むが、梅公一人、オーラ山に向かう。 参照：霊界物語第 66 巻第 1 章「暁の空」～ 第 6 章「神軍義兵」。

梅公はオーラ山への途中、幸運にもサンヨの娘花香の危難を救うことができた。そして男女二人、齒の浮くようなロマンスを展開しつつオーラ山に進み、ヨリコ姫を頭目とする山賊の巖窟に突入し、詐術を以て人を迷わせていた大杉の怪しい光を吹き消し、天狗の声色を使って、シーゴー、玄真坊ら悪党どもの肝を奪ったのだが、ヨリコ姫に見破られ、サンダー、スガコ姫が幽閉されている石室^{いしむろ}に投げ込まれてしまった。そして、他の宣伝使のように千言万語を費やす要もなく、兇悪な悪神の巨頭ヨリコ姫らの一派を翻然として悔悟せしめたのである。

ヨリコ姫は梅公と花香の勧めもあってタライ村に帰り、母のサンヨ宅に戻った。そして、今後の母の心を安んじ、かつ神と世のために、愛善の道に生涯を投じることを誓った。母のサンヨは、二人の娘が梅公司の艱難辛苦の結果と慈愛心の発露によって無事に母子対面ができ得たことに感謝し、梅公をまことの生神と感じたのである。

シーゴー坊や玄真坊は、サンダーの両親に心より謝罪した⁴⁴。サンダーの両親は数多の所有地をシーゴーに与え、彼らをして開拓の事業に従事せしむることとなった。このシーゴーはサンダーとスガコ姫を主人と仰ぎ、三千の部下とともに開拓に勤しんだ。スガコ姫の父ジャンクは従軍中ではあったがこの消息を知り、ジャンクの所有する無限の山林をも提供した。これらの山林の開墾を通じて、この地一帯は大きく発展した。ただ悔い改めた筈の玄真坊は再び悪化

⁴⁴ 霊界物語に流れからは外れるが、この謝罪にヨリコ姫が何故加わっていないのかはわからない。自らの出身里の里長ジャンクの娘を拐かした件をヨリコ姫が知らなかったと考えざるを得ないのであるが理解しにくい。

して三千の部下のうちの不平組三百余名を引率して地教山方面指して姿を隠したのである。以上参照：霊界物語第 66 巻第 7 章「女白浪」～第 67 巻第 1 章「梅の花香」。

梅公はヨリコ姫と花香を導き、照国別一行に合流すべく、オーラ山の間道を涉り、高原地帯の径数百里の大湖水であるハルの湖の岸边に到着し、波切丸に身を任せた。スガの港への途中、海賊の襲来に神はヨリコ姫を使って追い払い、座礁の際には梅公の救助祈願の祝詞で事なきを得た。船長をはじめ乗客一同、梅公の前にひざまずいてその神徳を讃め称え、かつ大神に感謝の誠を捧げたのである。ちなみに、開墾作業に従事しつつある筈のシーゴーが、心の迷いからヨリコ姫を慕ってこの波切丸に同乗していたことがわかり、ヨリコ姫によって諭される場面も用意されている。

ハルの湖の有名な浮島が陥没する様子が描かれている。山頂が大きな虎になって岸边に辿り着いて泳いで逃げて行ったあと、浮島はゆっくりと陥没してしまう。この現象と梅公の乗船との関連が示唆されている。

この浮島陥没を見たシーゴーの人生観は大きく変わる。この事件を契機にして、船客の一人、スガの里のウラル教信者である薬問屋イルクと船の救い主梅公が宗教談義があるが、この会話中に三五教の「神人一致」の考えが示される。薬問屋イルクとその妹ダリアや、この二人の父親アリスの悪業を通じて愁嘆場が生まれたが、梅公の教えを通じて、アリスを両親の敵と狙った青年アリーだけでなく、アリスの子イルクとダリアの心の慰撫も得ることができたのである。以上参照：霊界物語第 67 巻第 2 章「思想の波」～第 10 章「スガの長者」。

デカタン高原の西南に位置するウラル教奉じるタラハン国のカラピン王とその王妃モンドル姫には、太子スダルマン、王女バンナの二子があった。王妃は後に王も、妊婦の腹を割き胎児を丸焼きして舌鼓を打つなどという残忍性があった。左守シャカンナは憂い、民心は国家を離れ革命勃発の情勢にあることを

ちよつかん
直諫する。忠臣シャカンナを庇った妻ハリスタ姫は王に無礼討ちされ、シャカンナは 6 歳のスバル嬢とともに山中の岩窟に逃げ落ちる。その後 10 年が過ぎ去り、スダルマン太子がこの岩窟に現れ、スバル姫との恋愛にのめり込んで行く。この二人の危急の場に梅公別が訪れ、この二人を頂点とする豊かな祭政一致を実現させる。もともと在った大宮山の盤古親王の社に代わって、梅公別の指揮で、以前より数倍宏大かつ立派な三棟の社殿を造営し、中央には大国

常立尊と豊雲野尊を祭り、左の宮には神素盞鳴尊と大八洲彦命を鎮祭し、右の宮には盤古神王及国魂の神を鎮祭してこれをカラピン王家の産土神とし、永遠に王自から斎主となり奉仕することとなった。参照：霊界物語第 67 巻第 11 章「暗狐苦」～第 22 章「憧憬の美」、第 68 巻第 17 章「地の岩戸」～第 21 章「祭政一致」。

デカタン高原で最も土地の肥えるトルマン国ではウラル教を奉じていた。国民の過半数はウラル教徒であった。バラモン教の大黒主は宣伝使を遣わして、トルマン国をバラモン教に帰順せしめんとしたが効果がなく、寵臣キューバーに命じてスコブツエン宗という変名同主義の宗教を作り上げて一定の成果は出していたのであるが王などには響かず、大足別將軍はキューバーの導くままに、三千の兵を引き連れて王城を包囲する。その状況の中、先のタライ村里長ジャンクなどが義勇兵に参加し、彼は第一軍の司令官として活躍する。王妃千草姫は軍師として乗り込んできたキューバーに秋波を送り、わが部屋に導き入れて不戦勝の方策を講じたのであるが、キューバーと千草姫が互いに手を握りしめ合った途端に気絶し、正気に復した時には、千草姫の肉体には高姫の精霊が再生していたのである。照国別と照公の功績もあって王城の危機を脱したので、国王は三五教の大神を信仰することを誓ったのであったが、高姫の憑依した千草姫のまたぞろ「日の出神」⁴⁵の活躍で、照国別、照公は王によって重罪犯人として投獄される。参照：霊界物語第 70 巻第 1 章「信人權」～第 17 章「春の光」。

風前の灯のトルマン国の危機を救うために、言霊別の化身梅公は、ハリマの森に参詣する千草姫の輿に近づき、たちまち逮捕される。輿の中から梅公の美男子ぶりを見た千草姫は、家臣に命じて王城へつれ帰り、わが部屋に通した。

梅公は妖玄坊ようげんぼうの奎助もくすけ（第 49 巻）の再生と化けすまして千草姫に仁恵令を施すようにすすめる。千草姫は王に命じて、ジャンクら囚人を残らず解放した。そのため、照国別、照公なども活躍が可能となり、チューイン太子を中心に体制の大

⁴⁵「高姫」は、本説明書初出であるが、この後、頻出する。ウラル姫の改名大気津姫神の娘で、素戔鳴尊、瑞霊に対し、ウラナイ教を樹て執拗に攻撃する。改心をしたこともあったが、その執着心から抜け出せず、霊界物語では繰り返し登場し、最後まで改心できない。三神系時代別活動表では、神系の垂直破線に載せられていないが、この記述から、稚桜姫第三女の常世姫に辿ることができる。高姫の口癖の「変性男子の系統（ひっぽう）」は次の第 16 巻第 19 章「文珠如来」での黒姫の悦子姫への台詞から理解できる。「三五教は良の金神の教を樹てとる様な顔して居るが、本当は素盞鳴尊の教が九分九厘。黒姫はそれがズンとモウ気に喰はぬので、変性男子の系統の肉体の、日の出神の生宮を力と頼み」。

改革が可能となった。千草姫（高姫）は照国別の神力に恐れて何処ともなく姿を隠した。 参照：霊界物語第 70 巻第 18 章「鳳恋」～第 22 章「優秀美」。

トルマン国をして小天国たらしめた照国別，梅公別，照公一行は，ハルの湖を入江の港より新造船常磐丸に乗って凱旋の途に就いた。時しも大暴風で激浪のため常磐丸も木の葉のように揺れるが，遠く老朽船高砂丸が木っ端みじんに打ち砕かれるのが見えた。照国別は身の危険を忘れて船頭を励まし漕ぎ着けて一同を救う。

この高砂丸には妖玄坊と高姫が乗っていたが，沈没直前自らだけでも助かるべく素っ裸になって脱出する。妖玄坊は獅子と虎の混血児たる正体を現し，高姫はその首に食らいつき，太魔^{たま}の島に漂着する。妖玄坊は白胡麻のような蟻と大蜘蛛の魔の藪に知らず飛び込み，たちまち幾万ともしれない蟻に噛みつかれて悲鳴をあげる。高姫は，この太魔の島にたまたま来ていた恋人同志のフクエと岸子の着衣を騙してはぎとり，その上，その二人の親切を利用して，魔の藪から妖玄坊を救い出させて二人の舟を盗んで逃げ出した。たほう，梅公別は照国別に「救うべき人あり」と暇を願い，近辺の町に上陸して小舟を借りうけて太魔の島に向かい二人を助けて，三人一つ小舟にてスガの港に向かう。

スガの山には改心したアリスの多額の出資と大勢の人々の真心によって三五の大神を奉斎する美しい宮居が建てられていた。スガの宮に仕えるヨリコ姫は宗教問答所を設けていたが高姫が憑依する千草姫に負けてスガの宮を，高姫と妖玄坊に取られてしまった。この状況下，スガの港の長者アリス宅の奥の間にて若主人イルク，老父アリス，妹ダリヤ姫，ヨリコ姫，花香姫，門番のアル，エス及びスガの宮の神司玉清別一同が密議に耽る折しも，照国別と照公別が凱旋し，遅れて梅公も参会した。一同はスガの宮回復の作戦計画を立て，翌日，大挙スガの山に詰めかけることになった。

スガの宮の神司玉清別をはじめ，天人のような三人の美人が千草の高姫と問答の結果，放逐されたとの評判が，スガの町さらに近在近郷まで拡がって，スガの神館へは押すな押すなの大繁昌で立錫の余地ないまで参詣者が集まってきた。そこへヨリコ姫などを先頭に大勢の老若男女が捻鉢巻して歌を歌いながら，神前に山車をひいてのぼつてくる。ヨリコ姫が高姫に，聖地の神司として身に一点の曇りもないのでしょうか，と問いかける。高姫は身に兎の毛で突ついた程度でも悪事欠点があつたら，この聖地に安閑と御用をすることは出来ませんと

言い切る。梅公が出てきて、あなたのご成功を祝ってお土産を持ってきたと葛籠^{つづら}を出してフタを取れば、太魔の島で高姫と妖玄坊が追いはぎして蟻の巣に放り込んだフクエと岸子が現れた。高姫は打ち倒れんばかりに驚いたが何とか惚けるがそうはさせじと梅公は畳みかける。梅公が合図の口笛を吹くと数十頭の猛犬が現れて百雷の一時に轟くような声で吠え立てる。妖玄坊の空助は正体を現して雲を霞みと消え去った。高姫も進退窮まり、金毛九尾白面の悪狐と還元し、大高山の方に中空駆けて姿を消したのである。以上参照： 霊界物語第 72 巻第 2 章「時化の湖」～第 22 章「妖魅帰」。

(3) 玉国別⁴⁶

神素蓋鳴大神の神言畏み玉国別は、道公、伊太公、純公を引率して、斎苑館を立出で河鹿峠を進み行く。途中、暴風に遭い、峠の下り坂の中程の懐谷に着いた時、河鹿峠付近に群棲するオナガザルやテナガザルは暴風襲来を予期して避難すべく数千とも知れず集まってきた。伊太公が間近にやってきた猿を押し倒したことが契機となって、幾万とも知られぬ猿が四人を襲った。ノソリノソリと近づいた一層大きな白毛の大猿は玉国別の目のあたりを後から搔きむしった。玉国別は両眼をつぶされ、アッと叫んでその場に打ち倒れた。四人の力尽きた時、獅子に載って時置師神が現れて猿の群を追い払った。玉国別は谷川の水で眼を洗い、一生懸命に大国治立大神に祈願して自らの慢心を懺悔した結果、左の眼が見えるようになる。

祠の森へと降りる途中、鬼春別の先鋒隊久米彦、片彦の一行と遭遇した。伊太公の軽々しい行動で、玉国別が眼を痛めて激烈な苦痛ゆえもあって、一行の命はあわや風前の灯という状況に追い込まれる。その危機一髪の際に時置師神に扮した木花姫命が獅子に跨がって現れ、一行は再び危機から脱することができた。参照：霊界物語第 43 巻第 3 章「失明」～第 9 章「輸入品」、第 12 章「双遇」。

玉国別一行は後続の治国別一行は、幸い祠の森で遭遇した。たほう、玉国別の妻五十子姫は霊眼で見た夫の遭難ゆえに、従者今子姫とともに夫の神業を助

⁴⁶ この節を玉国別が日本のこととして読むと興味深い。

○玉国別と治国別は日本 玉国別は日本のことである。後ろから玉国別の目をひっかいた白猿はロシアの事である。『霊界物語』の人の名はところの名やで。治国別はところの名やぜ。外国の事のように書いてあるのは皆日本の事やで。(昭和十九年 土井靖都氏拝聴)(木庭次守編, 1988. 『新月のかけ』 p. 445)

けるべく斎苑館を出て、玉国別の滞在する祠の森に到着して、邂逅する。治国別、玉国別の一行は、今後の方針を知るために、五十子姫が霊媒になる。国照姫命⁴⁷が懸かって、神素盞鳴大神の次の神命を伝えた。治国別にはランチ将軍の陣営を突破しペルシャを越えて黄金山に進むように、玉国別にはここに留まって、国祖大神、豊国姫命の御舎を造り、かつ教の庭を立て並べ斎苑館の咽喉たるべき河鹿峠を守るべしと。 参照：霊界物語第 43 巻第 15 章「温愛」、第 44 巻第 6 章「山下り」。

百日百夜を経て祠の森の神殿は完成し、節分の夜に盛大なる祭典を挙行了た。因みに神殿は三社建てられ、中央には国治立尊、日の大神、月の大神が斎られ、左脇には大自在天大国彦命並に盤古大神塩長彦神が鎮祭され、右脇には山口の神をはじめ八百万の神々が鎮祭された。この祭典がすむと同時に玉国別の眼病は全快し、以前にまして円満の相となり、にわかには神格が備わつて来た。直会の宴の終わりに再び五十子姫に国照姫命が懸かって、それぞれの使命を示した。参照：霊界物語第 49 巻第 5 章「復命」。

玉国別は獅子河を渡ってバラモン教の落ち武者数百人に包囲される。その際に伊太彦（元の伊太公）が敵の槍先に股を刺されたので真純彦（元の純公）は伊太彦を小脇に抱えて逃げ去った。

取り残された三千彦は玉国別を訪ねてゆくうちに、テルモン山より流れ落ちるアンブラック河（聖なる河）の河辺に着いた。そして強風に吹き飛ばされて泥田に落ちて身は泥田に沈んでゆく。三千彦は天津祝詞を奏上し「せめて精霊を天国に救わせたまえ」と声を限り祈る中、初稚姫の愛犬スマートが現れて救い上げられ、立派なバラモン教の宣伝師服を与えられる。神意を感じて、バラモン教の宣伝使と化けこんでバラモンの神殿があるテルモン山に向かう。その途中、テルモン山の館を守る小国別^{をくに}の妻小国姫と出会い館に案内される。テルモン山はバラモン発祥の地であり大黒主から如意宝珠を保管していたが、それが紛失してしまったことなどについて相談される。三千彦が神殿に進んで祈ると、スマートの精霊が三千彦に懸かり、家令の伴ワックスの種々の悪巧みに由来していることを知る。三千彦はスマートと神の守りによって、テルモン山のバラモン教の神司以下の危難を救った。

そこへ玉国別一行が三千彦を探し求めてやってきて、テルモン山のこの神館

⁴⁷ 大本開祖のこと。霊界物語小事典

めでたく会合し、神館と宮町が平和に治まるのを見定めた上で離れることになる。なお、この地でテルモン山の神司夫妻の娘デビス姫を三千彦の妻としている。

三千彦とデビス姫を含む玉国別一行はテルモン山を下ってテルモン湖の辺に到着する。待ち受けていた怪しい漁船に乗りこむが、執拗に船底で待ち伏せていたワックスらが攻撃を仕掛ける。この場も初稚姫に助けられ、玉国別一行は初稚姫が用意した初稚丸の客となるが、他方、初稚姫は愛犬スマートに乗って去って行く。

初稚丸は途中、ツミの島に流された人々を救い、続いてしょうじょう猩々島では、漁に出て暴風に遭い漂着したイズミの国の豪農バーチルに出会った。このバーチルがこの島で三年間妻とした猩々姫や子供たちとの別れの悲劇も見せられた。さらに魔の海と言われる水域に入り込みフクの島にも近づき得て、バーチルの番頭アンチーを救っている。初稚丸は、イズミの国のスマの里の浜辺に安着し、一行はアズモス山の南麓にあるバーチルの館に向かう。

バーチルの無事帰館した御礼の祭典が挙行されたがその準備に関わって、バラモン教徒の家（異教の例）で大本式の祭典をする方法が示されている。直会最中に、バラモン軍のキヨの関所のチルテル以下数十人が乗り込んでくる。以上参照：霊界物語 第 56 巻第 15 章「猫背」、第 58 巻 第 7 章「神船」、第 8 章「孤島」、第 14 章「猩々島」、第 24 章「礼祭」、第 25 章「万歳楽」。

祭典の後に、三千彦の妻デビス姫がバラモン軍に連れ去られたことがわかり、三千彦と伊太彦が救出に行くが関所の落とし穴に落ち、さらにはチルテル以下全バラモン兵、ワックス一味も落ち、救出にきた玉国別も落ちる。玉国別の述懐歌と三五の皇大神への祈りに、思いもよらず初稚姫が霊犬スマートと共に現れて全員を助け出した。 参照：第 59 巻第 1 章～17 章。

玉国別は、バーチルの妻サーベル姫に憑依した猩々姫の願いをうけて、伊太彦が指揮官としてテルモン湖の猩々島の 333 匹の猩々たちを船に乗せて、スマの里に戻ってきた。猩々ヶ島の沢山の眷族はもともとアズモス山のお宮に仕えてみたものと玉国別は直覚していた。そしてアズモス山に二棟の宮殿を造営し玉国別が斎主となって、東の宮に大国常立大神、西の宮に大国彦を鎮祭した。元来、スマの里は山野田畠一切、バーチルの富豪に併呑されていたが、アズモス山の御造営い完了とともに、彼は一切の資産を開放して郷民に万遍なく分与

する事ことにした。サーベル姫は村人代表者十数人を膝元に集めて、一切の帳簿を取り出だし、快くこれを手渡し、自分は夫と共に永久にアヅモス山の大神に仕えることを約した。ここでまた郷民の祝宴は盛大に開ひらかれ、夫婦の万歳を祝し合った。

この祝宴の際、サーベル姫に懸かった猩々姫は、アヅモス山天王の宮跡の石蓋を開けて竜王を救って欲しいと玉国別に頼む。そこには月照彦大神に三千年の間、押し込められたタクシャカ竜王が居て、八千万劫の末までと覚悟していたが仁慈の神の御恵みに感謝するとして、その改心至誠を顕わすべく風水火災を自由にする夜光の玉を玉国別に捧げた。そして、その妻サーガラ龍王は夫の救済を機に、テルモンの湖水から現れて玉国別に如意宝珠の玉を献じた。ここに玉国別はバーチル、チルテルなどに主神の神教宣伝法を授けて別れを告げ、ハルナの都をさして出発する。 参照：霊界物語第 60 巻第 7 章「方便」～第 11 章「法螺貝」。

玉国別一行はスダルマ山麓で伊太彦らと別かれた後に、スダルマ山の峠上で夜月の下で教え談義をしている場に、月の御国の大神で産土山の神館に跡垂れし三千世界の救世主、神素盞鳴大神が降臨され、神訓に出逢った⁴⁸。 参照：霊

⁴⁸ <神素盞鳴大神が山上の神訓>

一、無限絶対無始無終に坐しまして霊力体の大元霊と現はれたまふ真のはただ一柱在すのみ。之を真の神または宇宙の主神といふ。

汝ら、この大神を真の父となし母となして敬愛し奉るべし。天之御中主大神と奉称し、また大国常立大神と奉称す。

一、厳の御霊日の大神、瑞の御魂月の大神は、主の神すなはち大国常立大神の神霊の御顕現にして、高天原の天国にては日の大神と顕はれたまひ、高天原の霊国にては月の大神と顕はれたまふ。

一、愛善の徳に住するものは天国に昇り、信真の光徳に住するものは霊国に昇るものぞ。

一、このほか天津神八百万坐しませども、皆天使と知るべし。真の神は大国常立大神、またの名は天照皇大神、ただ一柱坐しますのみぞ。

一、国津神八百万坐しませども皆現界における宣伝使や正しき誠の司と知るべし。

一、真の神は、天之御中主大神ただ一柱のみ。故に幽の幽と称え奉る。

一、真の神の変現したまひし神を、幽の顕と称へ奉る、天国における日の大神、霊国における月の大神は何れも幽の顕神なり。

一、一旦人の肉体を保ちて霊界に入りたまひし神を顕の幽と称え奉る。大国主之大神および諸々の天使および天人の類をいふ。

一、顕界に肉体を保ちて、神の大道を伝え、また現界諸種の事業を司宰する人間を称して顕の顕神と称へ奉る。

しかして真に敬愛し尊敬し依信すべき根本の大神は、幽の幽に坐します一柱の大神のみ。その他の八百万の神々は、主神の命に依りて各（おのおの）のその神務を分掌したまふものぞ。

一、愛善の徳に住し信真の光に住し、神を愛し神を信じ神の為に尽くすものは天界の住民となり、悪と虚偽とに浸りて魂を曇らすものは地獄に自から墮落するものぞ。

界物語第 63 卷第 4 章「山上訓」。

たほう、伊太彦はスダルマ山麓でしばらく神懸り状態となつて、にわかになつて若々しくなり、体の相好から顔色まで玉のように美しくなる。これは木花姫命の御霊が伊太彦に使命を果させるべく御守護になつたゆえであった。伊太彦一行は、神恩で死線を越えて無事、スーラヤの湖面から七千三百尺およそ 2000m 余りのスーラヤ山頂に立った。そして洞窟を降って行き無数の玉が光る場に出会う。奥方にはウバナダ竜王が沢山の眷族をつれて蜿蜒と蟠っているのが見えたが、伊太彦一行は寂滅為楽の危機に見舞われる。厳しい拷問に一人を除いて耐え抜いて信仰を落とさなかった。その時、初稚姫の愛犬スマートが『ウーワウ　ワウ　ワウ』、この声を聞いて妖婆はたちまち銀毛八尾の正体を現わして雲を霞と逃げて行った。

感謝の祝詞をあげている場に、こつぜんとして猛犬スマートを引き連れて初稚姫の精霊が現れ、伊太彦が試験に及第したことを伝えた。竜女は、「神代の昔、大八洲彦命様よって妾の改心のため、この岩窟に閉じ込められ修行をさせて頂いていた、この度の神政成就で、いかなる悪神もお赦し下さる時節が参ったので、この宝玉を大切に保護して待っていた」という。さらに、「伊太彦の神力不足で解脱できなかった、伊太彦一行が死んでしまうのを恐れてはいたが、神力無限の初稚姫様の言霊を承けて、昔の罪障もほどけ執着心も取れた、今までの醜い姿も消え、こんな天女となった、この玉は伊太彦様に授けるので、この玉をエルサレムに献上しお手柄となさつて下さい、妾は十二人の侍女と共に天に登り、ハルナの都の言向け和しに影ながらお助けを申します」と言いながら、夜光の玉を伊太彦に渡した。この後、初稚姫の案内で無事、玉国別一行と合流できたのである。

玉国別一行は、スーラヤの湖をわたり、エルの港に到着し、初稚姫の「三五の神の御規は唯一人道伝え行くぞ務なりけり」との教示により、玉国別は真純彦を伴い、その他は一人旅となりエルサレムに向かう途中にも幾多の神の試練に合いながら進み行く。以上参照：霊界物語第 63 卷、第 2 章「妙法山」、第 3 章「伊猛彦」、第 5 章「宿縁」～第 16 章「諒解」。

なお、この引用は校定版第 63 卷 pp. 63-65 に基づいているが、「給ふ」についての表記がひらがなのみの表現が見られ、ひらがなに統一した。「而已」なども同様の理由でひらがなのみとしている。なお、「称え」のルビを見ると、幽の幽、幽の顛、については「たた」で、顛の幽、顛の顛については「とな」として、区別されている。

玉国別、真純彦は足を速めて漸くエルサレムにほど近いサンカオの里に着いた。ここにはシオン山より流れ落ちるヨルダン川が流れている。その北岸を進む折、数十里隔てた東方の虎熊山が爆発した。灰煙の中を息も絶え絶えに進み行くところを初稚姫に助けられ、八大龍王の一つマナスインナーガラチャーの危難を逃れて、初稚姫のお供をして、漸くヨルダン川の渡し場に着いた。迎いの舟に乗せられて日出別命をはじめ数百人の神司や信徒に守られ、安の河原と称えられたゲッセマネの園へと練り行く事となつた。

玉国別一行が龍王の三個の玉を捧持して来たその功績を賞するため、特に埴安彦尊の命により歓迎会が開かれた。コーカス山よりは言依別の神が数多の神司を引率し二三日前に早くも聖地に到着されていた。玉国別、真純彦、治道居士、三千彦、伊太彦、デビス姫、ブラブーダ姫、その他の人々は集まってきた、七福神⁴⁹の姿となつて、いやここに七福神宝の入船の奉祝神劇⁵⁰は演ぜられたのである。

この時は、玉照彦命、玉照姫命のご婚礼で九月八日の吉日であった。以上参照：霊界物語第 65 巻第 24 章「危母玉」～第 26 章「七福神」。

(4) 治国別

万公、晴公、五三公の三人の供を従える治国別は河鹿峠の頂上で、斎苑館に攻め上るバラモン軍のうち、片彦久米彦將軍らが率いる一隊を、言霊の力で玉国別一行が待機している祠の森方面に追い散らした。玉国別は前述のように両眼を負傷して言霊戦で力が発揮できず危機一髪で、木花姫命扮する巨大な獅子に跨がる時置師神に救われる。その後、祠の森で治国別一行は玉国別に合流する。治国別の従者五三公と玉国別の従者純公が見張りをしているところへ、敵軍片彦將軍秘書のマツ公とタツ公がやってきて、お互い打ち解けて、治国別一行が探していた伊太公が清春山の岩窟に幽閉されていることがわかり、マツ公が治国別の実の弟とわかる。マツ公と対面した治国別は、マツ公に対し、三五

⁴⁹ 玉国別：寿老人、真純彦：毘沙門天、治道居士：布袋尊、三千彦：恵比寿天、伊太彦：大黒天、デビス姫：弁財天、ブラブーダ姫：福祿寿？。会話からするとブラブーダ姫は、高齢男子の福祿寿ではない。七福神は紅一点と言っているのも、不思議だ。

⁵⁰ 神劇の次第は左記の通りとして、歌われるがこの前半に神系について示されている。

そもそも我が日の下は神の御国なり、天地ひらけ陰陽分われ、青人草を始めとし、万物爰に発生して、天地人の三体備はりぬ、天津御国の太元は、大国常立の大御神、又の御名は天照皇大御神なり、地津神の太元は豊国主の大御神、又まの御名は神素盞鳴尊、豊葦原の瑞穂の国産土山の、底津岩根に宮柱太敷立て、三五の神の都を奠め賜ひしより、千代万代に動きなく、天下泰平国土安穩、五穀成就万民鼓腹撃壤の樂みを享く。

の真をあらわすように迫った。なお、タツ公はマツ公の妻の兄である。(3) 玉国別、の項で述べたように、このあと、五十子姫と今子姫が現れ、五十子姫の神懸かりによって、玉国別と治国別の今後の使命が知らされる。以上参照：霊界物語第43巻第3章「失明」、第10章「夜の昼」～第15章「温愛」。

五十子姫、今子姫が治国別一行と合流した場で、救出した伊太彦を伴って松公(元のマツ公)、竜公(元のタツ公)が現れる。治国別は二人に今後は一緒に神業に尽くして貰いたいと宣言する。兄弟が別れた後の状況が松公によって語られる。ウラル教のアーメニアの神都はバラモン教一派の襲撃での大惨事であった。ウラル彦、ウラル姫一族は常世の国に逃げ、諸司百官庶民の住宅は焼き亡ぼされ、そんな中、松公は父母兄弟と生き別れ、死に別れした。あてどなく漂流するうちにバラモン教の片彦将軍に見いだされ、兄の所在を探ることを唯一の目的としてこれまでの日々を送ってきた、とのことである。参照：霊界物語第44巻第2章「月の影」。

治国別一行は老樹鬱蒼たる河鹿山南麓の山口の森に黄昏時によりやく到着し、おおよまづみのかみ大山祇神の社殿跡で一夜を明かすことになった。晴公は言霊戦での自らの不甲斐なさに一人眠れずにいたが、境内で妖灯に浮かぶ異様の怪物を目撃する。この日は二十一日満願成就の日であったのに晴公に見られたことで、やけくそで懐剣を以て晴公に飛びかかろうとする。治国別の霊縛の後、この怪物にみえた者は、扮装を脱ぎ化粧を洗えば、妙齢の美人であった。

この楓とその両親のうづひこ珍彦と静子はウラル教での騒動以来、兄に会うべくアーメニアを出て、ライオン河の辺で黄金姫と出会い、三五の教えを聞き朝夕、三五教の祝詞を唱えていた。両親はそこをバラモン教のランチ将軍の手下に見咎められて連れ去られた。楓はその場に居ず幸い逃れることができたが、両親はもう殺されたと考え、両親の敵を討ち恋しい一人の兄に会わせて頂きたいと二十一日参りをしていたと語る。治国別は霊眼で楓の両親は未だ殺されていないことを知り楓に伝えた。この話を通じて、晴公は楓が自らの妹であることを知るのである。そして、その日には、ランチ将軍片彦の手下が両親を運ぶかご駕籠に出くわして見事に救出するのである。

治国別一行は、河鹿峠の上り口(山口)まで珍彦、静子、楓、晴公の四人を

送った。親子四人は玉国別に面会し神殿造営の手伝いをして、珍彦静子夫婦はついでにお宮のお給仕役となり、楓は五十子姫の侍女となつて神殿の落成の後、斎苑館に行き、ついには立派な宣伝使となつて神の御恩に報じる身となったのである。以上参照：霊界物語第44巻第8章「光と熱」～第13章「山口の別れ」。

治国別は松彦（元の松公）、五三公、万公を野中の森に置き去りにして、竜公一人を伴い、神の命を奉じて浮木の里に駐屯するランチ片彦將軍の陣営に進み入ったのであるが、アークとタールの奸計に陥った。二人の靈魂は神の許しを得て中有界をはじめとし、第三、第二、第一の天国さらには霊国を巡覧することができたのである。そして、中有界にて伊吹戸主神から教訓を頂いて息を吹き返した。二人の身は浮木の森の陣営にあるランチ將軍の居間で、アーク、タールに看護されていた。治国別、竜公、アーク、タールは互いに無事を祝し蘇生の大恩を大神に感謝する。ランチ片彦將軍はじめ共に幽冥旅行をした面々は心の底から前非を悔い、神素蓋鳴大神の御前に両手を合わせ反逆の罪を陳謝し、三五の道に帰順した。参照：霊界物語第47巻、第48巻。

治国別に置き去りにされた後、松彦は宣伝使格となって、万公、五三公およびバラモン教のアク、タク、テクの六人となり、すっかり打ち解ける。素蓋鳴尊が神追いに遭われている頃で、松彦一行は、^{ベルシヤ}波斯国北山村で大気津姫（ウラ

ル姫）の娘高姫が開いたウラナイ教の流れをくむ^{いもり}蠓蠓別と魔我彦が開いた小北山の神殿を訪ねる。言依別命の内命をうけた松姫が静かに力を養いながら改革の時を待ち、長く離れていた夫松彦、さらに言依別命の化身五三公を待って、小北山の修祓を行い、あらためて国治立大神をはじめ、三五教を守ります天神地祇を鎮祭し、この聖場を清く正しく祭らしめたのである。そして、ランチ將軍などが三五の道に帰順した後に、浮木の森で治国別一行と合流したのである。参照：霊界物語第44巻第16章「怯風」～第21章「小北山」、第45巻、第46巻、第48巻第16章「途上の変」～第18章「冥歌」。

たほう、治国別はその後、素蓋鳴尊の神命により、インドのビクの国に向かう。右守ベルツの叛逆と、鬼春別久米彦両將軍率いるバラモン軍のために滅亡せんとするビクトリア王家を救援し、ビクの国で三五教の大神を祭り、後継者を定めてビクトリア国のミロクの聖代を現出せしめた。この時にビクトル山頂

上の社殿に奉斎された神は、大国常立尊をはじめ、天照皇大御神、神伊邪那岐大神、神伊邪那美大神、神素盞鳴大神、豊国姫大神、稚桜姫大神、木花姫大神、日の出神であった。盤古神王は別殿に祭られた。 参照：霊界物語第 53 巻～第 54 巻第 20 章「建替」。

治国別一行は刹帝利の催した直会の宴が終り一夜を明かし、未明よりビクトル山の神殿に王をはじめ一同は初詣をした。そこで竜彦（元の竜公）は神懸となった、その内容は次のようである。天教山の木花姫命である、治国別よ、ビクの国は後顧の憂いが無くなった。玉木村の里庄テムスの娘スミエルとスガールがバラモン將軍鬼春別久米彦一派に奪われ、道晴別（晴公）が救出に向かったが、危うくなっている。一時も早く猪倉山に立向かえ。松彦、竜彦、万公も共に行け、と。その後、治国別は鬼春別久米彦を帰順せしめ、テムス家に凱旋し、万公とスガールを見合わせて、松彦、竜彦、道晴別を連れ、先に進んだのである。 参照：霊界物語第 54 巻第 21 章「鼻向」～第 55 巻第 10 章「鬼涙」。

（5） 初稚姫

初稚姫はハルナの都に^{わだかま}蟠る大黒主の身魂を救い、天下の害を除くべく神素盞鳴大神の命を奉じて、供をも連れずただ一人征途に上ろうとし、百日有余を空助の宅に奥深く潜んで、神の教をよく調べ聖言を耽読した。初稚姫は、黄金姫、清照姫、照国別、玉国別、治国別などと同時に出征の途に上る筈であつたが、神素盞鳴大神の命黙し難く、ここに一百有余日、自宅での修業を命ぜられる事となつたのである。初稚姫は、斎苑館の神素盞鳴尊の大前に伺候し、八島主神の教示を受けて唯一人、征途に上ることとなった。 参照：霊界物語第 49 巻第 6 章「梅の初花」～ 第 8 章「スマート」

途中、河鹿峠にて妖玄坊の変化たる空助を看破し、霊験スマートを連れて祠の森の神殿を占領する高姫と妖玄坊を追い払い、三五教に帰順した小北山に立ち寄り松姫と語らい、妖玄坊の曲輪によって現れた蜃気楼的曲輪城の秘密を暴き、初稚姫によって救われたランチ片彦両將軍などによくよく真理を説き諭した。 参照：第 52 巻第 2 章「哀別の歌」～第 22 章「空走」。

すでに述べてきたように、初稚姫はスマートを派遣して、テルモン山で活動する三千彦を守らせて、小国彦、小国姫を助け、またテルモン湖上で賊に苦し

められていた玉国別一行を初稚丸で救い、続いてキヨの関所の陥穽に落ちて危機一髪の玉国別一行とチルテルなどを救い出した。 参照：霊界物語第 56 巻～第 59 巻。

さらに伊太彦がスーラヤ山のウバナンダ龍王より夜光の玉を受け取る神業を支え、玉国別一行には宣伝使は一人旅と教示し、虎熊山爆発の際にはここに住むマナスインナーガラシャー竜王が玉国別、真純彦に危害を加える直前に救うなど特に玉国別一行の神業を支え、かつ重大なる教訓を与えてエルサレムの聖地（黄金山）へ導き、玉国別一行をして七福神の楽遊びの神劇に参加せしめられた。 参照：霊界物語第 63 巻第 14 章「嬉し涙」～第 16 章「諒解」、第 65 巻第 15 章「饅頭塚」～第 26 章「七福神」。

以上のように宣伝使達は主の神の神徳を輝かしつつ、神を力に誠を杖に、神から授けられた言霊を唯一の武器となし、宣伝歌の徳によって、すべての神人も悪神をも善道に救い、野立彦命の代神、埴安彦命の現れませる黄金山山麓の聖地エルサレムに参拝し、三五の神教を伝えながら、ハルナの都に迫ったのである。

（6） 結論

既刊の霊界物語（第 1 巻～第 72 巻）にはほぼ右のように、三つの神系の活動について述べてあります。

これより後は未発表のために、いかようになるか詳細はわかりませんが、第 1 巻序文や、既刊の物語中各所に述べてある所を総合しますと結論は、神素蓋鳴大神が多数の三五教の宣伝使を引き連れて、ハルナの都に迫りたまうと、大黒主は再び我が国に逃げ来たり、出雲の大山に潜む時、大神は自ら数多の天使や宣伝使を率いて来たりまし、神力を発揮して、八岐大蛇、邪神悪狐の靈魂を言向け和し、ついに^{かわかみ}出雲の日の側上において、叢雲の宝剣を得たまひ、これを天祖天照大御神に献上して至誠を天地に現わしたまひ、五六七神政を成就し、松の代を建設し、国祖をして地上霊界の主宰神たらしめ、天下万民の災害を除き、救世の大道を樹立したまひし長大なる太古の神代の物語の大要を発表される事になっていたのは明白であります。 この関係参照：第 1 巻序 1 頁、第 37 巻序 2 頁、第 39 巻総説 1 頁、第 41 巻序 1 頁、第 59 巻序 1 頁。

◎ 追記⁵¹

以上の神系表説明書は、第二次大本事件の証拠として提出したものでありまして、昭和十年秋頃に第一稿が成り、昭和十四年に証拠として京都地方裁判所へ提出したものであり、昭和十六年大阪控訴院に、更に神系表に丁寧なる説明書をつけて提出いたしました。因みに、本書の基本となる霊界物語三神系時代別活動表は、昭和十七年八月七日未決より聖師様がお帰りになりました年の秋頃、お目にかけますと、「あゝこれは王仁が書いたのか」と、その誤りなきを証明して頂いたものであります。

しかしながら、本書は霊界物語の真理の上から見ますと、神竜の片鱗にも及ばない一つの研鑽資料であることを申し上げて置きます。

皆様に（幸い）参考となる場合は聖師の御徳であり、もし誤りがあれば編者の不徳であります。本稿は霊界物語を赤子の心になって文字のまま拝読して歴史的（時間的）に編んだものであります。なにとぞ、この書を読まれた方々は進んで霊界物語を拝読熟読されまして、神理を体得されむことをお願い申し上げます。

昭和二十七年一月十五日

編者 木庭次守謹言

⁵¹ この追記より前までは、第二次大本事件の証拠として提出されたものであることが、これで確認される。本論文のはじめに監修者木庭元晴が脚注で述べたように一部変更していることをご理解頂きたい。